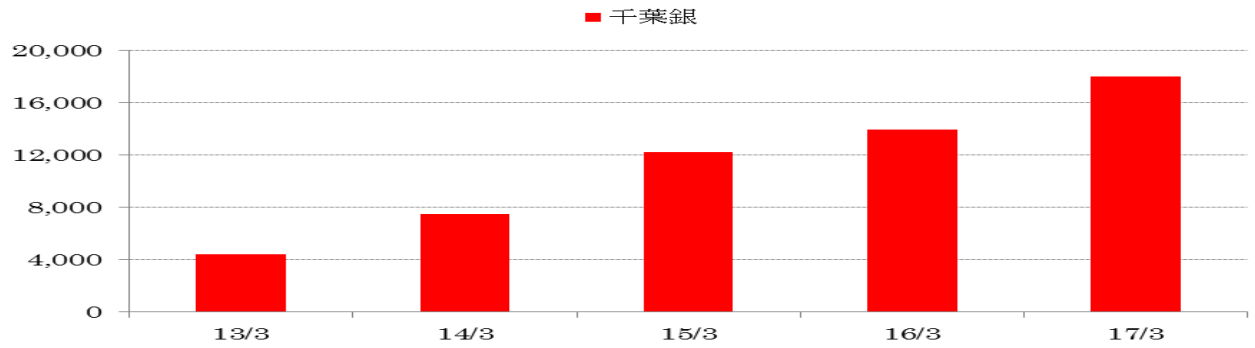
ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

データが指し示す先-11-（銀行の余剰資金）

先頃、銀行の前期（17/3 期）決算が出揃いました。予想されてはいたことですが、マイナス金利下、収益的に厳しい決算が多かったようです。「預金を集め、貸出や有価証券（国債等債券）に回し利鞘を得る」という銀行の基本ビジネスモデルが非常に難しい状況に陥っています。何とか利鞘を確保しようと、日本より高金利の米国債に投資したところ返り討ちに遇った（米長期金利上昇により損切り余儀なくされた）等という嗤うに嗤えない事例も伝えられています。日銀の試算によると、このまま推移すると数年の内に地銀の半数以上が赤字に転落するようです。そうした状況を間接的に示す数値を今回は取り上げてみました。銀行の手元余剰資金（「現金＋預け金」の合計としました）残高推移です。本当は複数行の推移を並べてみればいいのですが、グラフ化能力がないため千葉銀１行の数値をグラフにしてみました。（単位：億円）



銀行は手元余剰資金を極力少なくするのが基本ですが、2013 年 4 月の日銀の異次元の金融緩和策（通称、黒田バズーカ砲）スタート前の 13/3 期から 17/3 期まで余剰資金がグングン積み上がって状況が見て取れます。この４年で実に４倍です。千葉興銀、京葉銀は下表の通りです。

	千葉興銀	京葉銀
13/3 期	404 億円	425 億円
17/3 期	1,285 億円	2,149 億円
増減率	3.1 倍	5.0 倍

どうでしょうか、両行とも同じような状況にあります。勿論、こうした状況は大手含めどこの銀行も同じです。余剰資金が積み上がる中、銀行が力を入れているのは余剰資金を使って（顧客の預金を下ろさせて）手数料を稼ぐビジネスです。具体的には、投資信託の販売であり保険積立商品等の販売です。ですから、今や銀行が預金を集める目的が、それを貸出に回すというより、それを他業態の商品購入に振り向けるという目的に変質しているのです。これは一時的な現象でしょうか、それとも長期的な趨勢にある動きでしょうか。

直ちに断言できるとは思いませんが、銀行の基本的業務（預金、貸出、為替）そのものが大きな転換期にあるような気がします。先月、日銀が公表した「金融システムレポート」の中で、日本の地銀の行員１人当たりの業務粗利益が欧州と比較して半分程度で、給与は欧米とほぼ同じ水準にあるが行員数が際立って多いのがその要因であると指摘しています。この地銀の生産性の低さは、どの地銀も同じようなサービスを同じような体制で提供している為に競争は激しく収益が上げにくいところにあると分析していますが、問題の根幹は、このような金融システムを構築してきた日銀にも責任の一端はあるように思います。

いずれにせよ、銀行が余剰資金を積み上げている状況は金融システムが上手く機能していないことを示しており、異次元の金融緩和策の負の側面の一つと云えるでしょう。

では、これから銀行はどこに向かって進むのでしょうか。判らない部分が多くありますが、判っていることが幾つかあります。「預金を集めて運用する」というビジネスモデルそのものは無効ではないと思いますが、「多くの店舗を構え多くの行員を揃える」というスタイルは末期を迎えているということです。新しいコンセプト、新しい技術、そして変革への情熱をもった人達が金融界になだれ込んできています。信組・信金から地銀・都銀に至るまで、営々と築き上げてきた強固なビジネスモデルが、その強さ・大きさ故に困難に直面する時期が迫っているような気がします。困難は乗り越えられるでしょうか。